

キリスト道講演会（奈良第10回）

人生は神讚美！——詩篇から

2018年3月31日（奈良 春日野荘）

奥田 昌道

人生は神讚美！

詩篇19篇

詩篇23篇

詩篇25篇

詩篇27篇

詩篇31篇

詩篇33篇

詩篇34篇

詩篇36篇

詩篇37篇

詩篇46篇

詩篇57篇

詩篇62篇

詩篇63篇

詩篇84篇

詩篇91篇

詩篇

103、121、130、139篇

詩篇146、148篇

詩篇150篇

イザヤ書44章

祈り

●人生は神讚美！

今日は「人生は神讚美！」という題です。詩篇というのは、ここに「ダビデのうた」というのがたくさん出てきますけれども、それは本当にダビデ自身の歌もあるでしょうけれども、ダビデの願いにちなんで、思いをそこに託したということもあるだろうと思う。日本というならば、万葉集のようなものは、詠み人知らずというものがたくさんあるかと思う。そういう民族のところがそこに表れている。個人を離れて、民族の歌という感じを私は受ける。一つ一つの細かい言葉の解釈とかではなくて、そこに何を訴えようとしているのか、何に感動しているのか、何に讚美をささげているのかという、そういう心を受けとつて、遠いイスラエルの、我々からしたら本当にはるか彼方の向こうですけれども、何か人間としての共通性があるように思います。

日本もいわゆる「日の本の国」でしょ。

「日出づる所の天子、日没する所の何々に書を遣わす」

といった聖徳太子は大したもんです。日出づる国、太陽の国です。今日の詩篇19篇にも太陽のことが出てきますが、我々は太陽をいただいている。太陽というひとつの大きな生命の源、エネルギーの塊があつて、そこから悠久ゆうきゅうの昔から、熱、光、生命を注いでくれている。そして、地球上の生き物たちがそれで養われている。石炭とか石油とかは全部、太陽エネルギーが結晶したものがそういういったエネルギーになっている。太陽という万物を照らす存在があつて、たった一個の地球を照らして、生命づけている。これが本当の世界だと思う。地球上で争いがあつたり、イデオロギーの違いで「どうだこうだ」なんて言っている、そういう低次元ではなくて、本当にたった一つの太陽がこの地球を守り導き引つ張つてきてくださっている。

太陽がなかったら、地球というのは存在しえない。地球の側から太陽に何か恩返ししているか。全然やっていない。もらいつばなしなんです。

「聖書に表れている神さまとはどんな存在か？」

「神さまは太陽のごとき方だ」



という。日本人は太陽が好きですよ。御来光を拝む。山登りに行かれるとみな太陽を拝んでいるでしょ。

「あれは偶像崇拜だから、いかん」

なんて、そんなケチくさいことは言わない。太陽は生命の源ではないですか。

「太陽の光を浴びて、さあ今日も生きよう」

という、そういう元気づけてくれる太陽。それが地球のはるか彼方にあつて、それが地球を引力で引つ張り回している。地球はグルグル自転して、その回りをまた廻っているから、春夏秋冬がある。日本というのはそういった恵まれた自然環境の中に育ってきたのだという感じがします。そして、この奈良と京都は日本の古都ですから、そういう所で毎年春になるとこうやって奈良で講演会ができる。

しかも明日は復活節の日曜日です。この復活というのは、キリストが息を吹き返したということではなくて、キリストの本来の姿が顕れただけなんです。本来は死ぬべきような方ではなかった。それがゆえあつて、我々が受けとらなければならない死というものを、

「罪の払う報酬は死である」

という、その罪の払う報酬の死を受けとられた。

ご自分は祈っていれば眩まばゆくなつて天に昇つていく方なんです。山上でそういうことがありました。ペテロ、ヤコブ、ヨハネを連れて山の上で祈つておられたら、眩い光の中にモーセとエリヤが顕れたという場面があります。ああいうふうに、あのお方は祈っていれば自然に靈化して天に昇つていくようなお方でした。そのお方が我々の死というものを、罪というものを全部背負いこんで、自分は「一粒の麦」となつて死んでくださったという、そういう愛そのもののお方です。

「人その友のために己が生命を棄てる。これより大いなる愛はなし」（ヨハネ

15・13）

と。友どころか敵対する人間、呪う人間、それに対してキリストは、

「父よ、彼らを赦したまえ。その為すところを知らざればなり」（ルカ23・34）

と言われた。ああいう言葉だけでも、ホロリとききますよ。そうじゃないですか。

「キリスト教はヨーロッパの宗教でけしからん。一神教はけしからん」

とくだらないことを言うのが多いんですよ、知ったかぶりして。

皆さんは、キリストの話の話を聞こうとして来てくださった。本当にありがたいことです。そんな宗教の範疇はんちゆうを超えた、生命そのものをあらわしてくださったのがイエスという方です。しかも、ご自分は、

「私は何者でもない。父なる神さまが私を通して、『しゃべれ』ということ伝えてるだけ、『やれ』という御意を顕しているだけで、自分は空からっぽだ」

という。空っぽだからこそ、神さまが100%に宿る。だから、



「私の言葉は私のものではない。私を遣わされた父が私の中で御業をなさっているのである」

と。そして、その方が向こうへ行つてから、弟子たちへ乗り移つて、伝道を始められた。あれが使徒言行録——昔は「使徒行伝」と言いました——です。ペテロやヨハネは凄かつたですね。足の立たない人を立たせたりした。

「金銀は我になし。我にあるものを汝に与える。キリストの名によつて立て」

と言つて手をとつて立たせたら、立ち上がつて踝がたちまち強くなつて躍り上がつて歓んだという。ああいう所を見ますと、本当に心が躍る。先入観を抜きさつて、素直に聖書の世界に入りこんだら、これは心おどらざるをえない。

そういう気持ちで私は聖書を読んでいます、特に新約聖書を。ここに持つてきていますのは、文語の小型版で「新約聖書（詩篇付き）」というものです。新約聖書に詩篇が付録についていて、その詩篇がまた素晴らしい。それで、今日は詩篇珠玉集ということで、詩篇の中から私の心がうたれる、非常に私が感激するようなものをずっと選んできました。それが皆さんのお手許にある資料です。

そういうことで、もう地球規模でいきましょう、宇宙的な気持ちで。

「ヨーロッパの宗教は、イスラエルの宗教は、一神教はけしからん」

なんて、そんな次元は超えて、神をたたえようということですよ。

「生きとし活けるものよ、神を讃えよ。生命の源である神を讃えよう。ばんざい！」

という、大乗的な気持ちで皆さんものぞんでくだされば、私はうれしいと思います。

それをこの講師の言葉の中にもちよつと書きました。自然万物は創造主なる神を讃えよう。人間だけが神讚美を忘れてしまったようだ。旧約聖書の「詩篇」は讚美の書なんです。讚美と祈りの書、これが詩篇です。そこには人間のさまざま願いが託されています。

「助けてくれ！ 悪いやつをやっつけてくれ」

というのがあります。キリストは、

「敵のために祈れ」

と言われたけれども、旧約の世界はそこまで行つてない。詩篇は、

「正しい者は神に救われる。悪い者は徹底的にやっつけてください。私は苦しめられて叫んでいるんです」

と。素直でいいですよ。キリストはそれを引っくり返して、「敵のために祈れ」と、そこへ突き抜けたらいいけれども。

旧約の詩篇の世界は、なにせ今から三千年前ですよ。紀元前千年のダビデの頃、その頃、日本民族はどうだったんでしょうかね。遠い遠いイスラエルの国、しかも歴史的に古い古い時代の3千年前のときに歌われていることが、もの凄く心を揺さぶるんです。しかも、あそこで貫かれている神さまというのは義の神さまです。義です。日本の文化は恥の文化



なんです。『菊と刀』とかベネディクトが言っているらしいけれども。

「そんな恥ずかしいことはやめておけ。人に笑われるからやめておけ」という、評価が人なんです。ところが、イスラエルは、義なる神さまです。

「人間の側はごまかしておいても、神さまはごまかすことができない」

と。しかも神さまは、「ああよしよし」と可愛がってくれるだけの神ではない。義、ただしい義なる神、それが貫いている。義なる神が貫かれたら、人間はふつ飛ぶんです、罪なる人間は。それを、「そうはさせん」と言って立ちはだかつたのがキリストなんです。

「罪は私が引き受けます。彼らをどうぞ救ってやってください。死は私が引き受けます。そのかわり、生命を彼らに上げてください」

と。イエスという方は、祈っていればそのままスツと霊化して、天に昇って行かれる方ですよ。そういう方がわざわざそれを棄てて、ご自分の生命を投げ出して、本来ご自分が受くべき栄光の生命をこの敵対する者にあげる。こんな愛がありますかというんですよ。特に日本の理性的な理知的ないわゆる知識人に対して、

「それを日本人は本気で考えたか。それに本当に体当たりしたか」と、私は叫びたい。

まあそういう世界が、三千年前に詩篇でうたわれている。キリストがまだ出てきておられない時に、私から見たら、神さまは怖い義の神さまで、その頃に生まれたらガツンとやられるような神さまです。その掟が律法でしょ、モーセ以来の。それを、

「蜂蜜のごとくに私の口に甘い」

「あなたを慕ってやみません」

とか、もの凄い愛着を示している。

「あなたの御言はわが足の灯火、わが路の光なり」

と、詩篇119篇にあるでしょ。詩篇119篇は「いろは歌」です。いろいろな所にキラキラキラキラ輝いている言葉が並んでいます。私はああいうものが大好きです。

そんなことで、私は本当に自分の祈りの、いわば道具の言葉として詩篇を使っている。詩篇は讚美と祈りでしょ。詩篇を読みながら、

「あつ、この祈りは、私はこれをいただきます。私も一緒に祈ります」といつて読む。

「主よ、我をあわれみたまえ」

とあれば私も、「我をあわれみたまえ」と祈る。

「主よ、讚美はなおき者にふさわしい」

とあれば、

「ああ、ありがとう。私はなおき者ではありませんけれども、あなたの十字架で私をなおき者にしてくださった。だから、全身全霊であなたを誉め讚えます」



とか、そうやって、詩篇をひとつの抛り所にしながら、私は感謝し祈り讚美していく。それが私の生き方なんです。

ですから、これから詩篇をたどっていきますけれども、そんな気持ちで読んでいく。なにかそこから教えを学ぶとかではなくて、

「ああ、私の気持ちをよく表しているな、うれしいよ、うれしいよ」

という感じなんです。どうぞ、皆さんもそんな思いでこの詩篇を愛読してくださればいいなと思っています。

今日は詩篇ばかりです。私がかっこに持っていますのは、文語訳聖書の小型版です。やはり、文語訳というのは響いてくる。この資料に引用してますのは全部、1955年の口語訳です。翻訳ですから、どのように翻訳しようと、いろいろ自由度が大きいと思うけれども、一応皆さんのお手許にあるものを抛り所としながら、文語訳の方もご紹介していきたいと思えます。私は日常は文語訳で読んでいます。

●詩篇19篇

では、詩篇19篇に入ります。まずこのプリントの方を読んでいきます。

「1もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手の業をわざ示す。

2この日は言葉をかの日に伝え、この夜は知識をかの夜に告げる。

3話すことなく、語ることなく、その声も聞えないのに、

4その響きは全地にあまねく、その言葉は世界の果てにまで及ぶ。神は日のために幕屋を天に設けられた。

5日は花婿はなむこがその祝いの部屋から出てくるように、また勇士が競い走るように、

その道を喜び走る。

6それは天の果てから昇って、天の果てにまで、めぐって行く。その暖まりを

被こうむらないものはない。」

ここまでを文語で読みますと、

「1もろもろの天は神の栄光をあらわし、穹蒼おおぞらはその手のわざをしめす。

2この日ことばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。

3語らずいわずその声きこえざるに

4そのひびきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにまでおよぶ。

神はかしこに帷幄あびほりを日のためにまうけたまえり。

5日は新婿にいむこがいわいの殿をいつるごとく勇士ゆうしがきそいはしるをよろこぶに似

たり。

6そのいでたつや天の涯はしよりしその運めぐりゆくや天のはてにいたる。

物としてそのあたたまりをこつがらざるはなし。」



「物としてそのあたたまりをこうぶらざるはなし」という。それが太陽なんです。我々は太陽によって本当に暖まりを受け活かされています。植物たちも太陽の光で育っていく。そういうことで、この19篇は非常に素晴らしい所ではありませんか。しかも、

「この日ことをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。語らずいわずその声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねく」

「語らずいわずその声きこえざるに」と、この世界なんです。白隠和尚の歌に、

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声聞けば生まれぬさきの父をしぞ慕う（父ぞ恋しき）」

とある。闇の夜に——今はネオンが輝いていますが——昔は闇の夜は本当に何も見えない。まっ黒けの鳥は姿さえ見えない。しかも、鳥は声を出さない。鳴かぬ鳥の声が聞こえるかという。「闇の夜に鳴かぬ鳥の声聞けば生まれぬさきの父」、まだ生まれてこない昔の父が恋しいと。そういう我々のいわゆる理性的な世界を突き抜けた世界を、白隠和尚はうたった。この19篇もそれなんです。

「語らずいわずその声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにまでおよぶ」

と。共通な所があるではありませんか。そういう非常に奥の深い世界。これを詩篇はうたっている。うれしくなってきましたでしょ。

そして今度は一転して、自分にかえるんですね。人間とは何ものかと。

「7主の掟は完全であつて、魂を生き返らせ、

8主の証は確かであつて、無学な者を賢くする。

主の論は正しくて、心を喜ばせ、主の戒めは混じりなくて、眼を明らかにする。

9主を畏れる道は清らかで、とこしえに絶えることがなく、

主の裁きは真実であつて、ことごとく正しい。

10これらは金よりも、多くの純金よりも慕わしく、

また蜜よりも、蜂の巣のしたたりよりも甘い。

11あなたの僕は、これらによつて戒めを受ける。これらを守れば、大いなる報

いがある。

12誰が自分の過ちを知ることができましようか。

どうか、わたしを隠れた咎から解き放ってください。

13また、あなたの僕を引きとめて、故意の罪を犯させず、これに支配されるこ

とのないようになしてください。そうすれば、わたしは過ちの無い者となって、

大いなる咎を免れることができますでしょう。

14わが岩、わが贖い主なる主よ、どうか、わたしの口の言葉と、心の思いがあ

なたの前に喜ばれますように。」

と。人を相手にしていない。「義なるあなた」が相手です。その義なるあなたがどうぞ私を



導いてくださいと。しかも、

「わが岩、わが贖主なる主よ」

とある。この「贖い」とは何ですか。

昔、遊廓で、親の借金を返すために身を売って捕らわれになつてしまった娘を取り戻そうと思つたら、それだけの借金を返してやらないとならない。ただ実力で引つ張つて行つたつてだめなんです。それだけの金を払わなければならん。お金を出して、そしてその女の人を連れ戻してくる。

贖いあがなというのは必ず対価を払う。我々の命を死から贖いあがなだされる。

「罪の払う報いは死である」

と相場は決まっています。神さまの世界では。「罪の払う報酬は死である」のに、その死をキリストは受けとる。しかも、キリストは祈つておれば眩くなつて天に行つてしまうような罪なきお方です。そのお方が我々の罪を全部背負いこんで、私たちを生命の世界へと連れ戻して、とり戻してくれた。これが十字架の贖いなんです。

だから、「贖い」というのは非常に深い言葉です。犠牲なくして、犠牲を払うことなくして、ありえない。それが贖いです。買い戻しとかいいます。ここでは、

「わが岩、わが贖主なる主よ」

と書いてます。旧約の時代の贖いは、昔は動物を屠ほぶつて、それを献げ物とする。それで自分の罪の赦しを請い求める。のちに現れるイエスの贖いのいわばシンボルとして、いろんなモーセの律法で、罪を犯した時にはこういうものを献げる、感謝の時には感謝の献げ物をするという、こと細かにレビ記なんかに書かれているわけですよ。ここでも、

「わが岩、わが贖主なる主よ、どうか、わたしの口の言葉と、心の思いがあなたの前に喜ばれますように」

と言っている。人ではない。人を相手にしない。恥はじの文化ではない。

「義ただしいあなたが本当に喜んでくださるように、あなたの前に全うな人間にしてください」

と。ここが素晴らしいんですよ。

日本にそういう神さまがいたろうか。天照大神あまてらすおおみかみというのが日本の神さまの源のようですよ。すけれども、どちらかというところ、そういう「義ただしい神」という觀念が日本民族にはどうも薄いのではないかという気がしてならない。それに対して、イスラエルの神さまというのは義なる神さまですから、罪は赦せない。罪には審判さばきが臨む。

イスラエル民族がバビロン捕囚とかいふ辛い目に遭っているのは全部、背そむきなんです。異民族と交わつて、邪教の方に引きずり込まれて、その審判としてバビロン捕囚とか、必ず向こうの民族的な苦しみには意味があります。エジプトに囚われていたときは、苦役くえきからの脱出ということをモーセはやりました。バビロン捕囚は、これから助けてくれたの



はキュロスというペルシャ王です。それが助けてくれた。だから、神さまは、使おうと思つたら、異民族であろうと何であろうと、お使いになる。目的を果たしたら終わるんです。それがイザヤ書40章にあります。

「慰めよ、慰めよ、わが民を慰めよ。もう罪に対する支払いを終わったから、さあ帰って来い」

というイザヤ書40章は、ああいう深い民族の歴史で、その民族を導いてきたのが義なる神さまです。アブラハム、イサク、ヤコブの神。そしてモーセにいたる。そういった霊的系統、霊統があつて、その中からこのダビデの時代がきているわけです。

そういうのを見ますと、さて、わが大和民族にはそういったものがあつただろうか。ついつい比較してしまう。大和民族には何があつたのだろうか。大和民族でやはり素晴らしいのは、聖徳太子です。聖徳太子は素晴らしいと思う。その他のことはあまり知りませんので、これ以上は申しませんけれども。

今から三千年前にこの詩篇のダビデの時代があつた。しかもそのダビデの前には、アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセがずっと来ている。そういったひとつの民族として歴史の重みがある。しかも、相手は神さまです。義なる神さまであつた。そういう民族というのはやはり凄いなあ、強いなあという気がする。

私が詩篇だとか、新約聖書とかに触れているときにはいつも、わが大和民族は如何にと——私は愛国者ですからね——わが大和民族は何とか本当の世界をリードするような民族であつてほしいわけです、霊的な次元で、精神の次元で。日本は戦争で70余年前、負けました。何をもって立つのか。それまでは軍事力だつた。文化国家と宣伝した。

私はドイツに若いときに留学していたときに、留学生を招いてくれたリュプケ大統領は留学生を前にして演説した。

「ドイツは武力で立つて、世界に大変なご迷惑をかけた。無茶苦茶なことをやった。

申し訳ない。でも戦後、我々は武器を棄てた。何をもちて立つか。世界中に友だちをつくりたい。留学生を招いて、皆さんはやがて自分の国に帰れば、それぞれの国のリーダー的な立場になる方々だ。皆さんがやがて、皆さんの時代がきたときにドイツを忘れないでほしい。世界中にドイツの友だちをつくりたい。それが

私の願いだ」

ということをリュプケ大統領は叫んだんですよ。そして一人ひとりと握手をしてくれた。ノーベル賞の物理学者ハイゼンベルクと大統領の二人が一人ひとりと握手してくれた。なにか感激しましたよ、私はまだ29歳の若造でしたけれども。やはり、ドイツは——今は知りませんが、けれどもあの頃のドイツは——そうやって戦後を立ち直ろうとした。

詩篇19篇にもどります。太陽を讃えています。太陽は東から昇つて西へ沈んでいく。それは今も——科学的な目からみたらそんなことはないでしょうけれども——素朴な人間の



気持ちとしたら、やはり東から出て西に沈む。山に登ったら御来光を仰ぐという、そういうのが自然でしょ。そういうナチュラルなものを否定する必要はまったくない。自然科学的にはこうだと。しかし、我々の気持ちからすれば、太陽が昇ってくる。

「ああ、真つ暗だった闇の夜が白んできて、太陽の光がさしてくる。ああ、うれしいな」

という、その気持ちがこの詩篇19篇に表れていると思う。

「6そのいでたつや天の涯よりしその運びゆくや天のはてにいたる。物としてそのあたたまりをこうぶらざるはなし。

という。そして一転して、

7エホバの法はまたくして靈魂をいきかえらしめ、エホバの証詞はかたくして

愚なるものを智からしむ。

と。聖書の中にとことごところ、

「神を知ることが知識の始めである」

という言葉が「箴言」の中に出てくる。やはり、人間は頭でつかちではだめなんです。さまの前に自分はいと小さき者だと。神さまは素晴らしいお方で、その前に謙虚であること。砕けのたましい、砕かれたころです。その反対は傲慢です。傲慢ではなくて本当に砕けのころが大事なので、それがしばしば詩篇にも出てきます。

8エホバの訓諭はなおくして心をよろこばしめ、エホバの誠命はきよくして眼をあきらかならしむ。

9エホバを惶みおそるる道はきよくして世々にたゆることなく、エホバのさ

ばきは真実にしてことごとく正し。

10これを黄金にくらぶるもおおくの純精金にくらぶるも弥増りてしたうべく、

どんな純金よりも神エホバの法の方が素晴らしいという。

これを蜜にくらぶるも蜂のすの滴瀝にくらぶるもいやまさりて甘し。

「蜂蜜よりもいやまさりて甘し」という。「へえー、私からみたら旧約聖書の神さまは恐い恐い神さまなのに、その恐い神さまの律法というものをこんなに慕っているのか」と驚くんです。そして次に、

11なんじの僕はこれらによりていましめをつく。これらをまもらば大なる報賞

あらん。

12たれかおのれの過失をしりえんや。

誰も自分の隠れた、知らずして犯すあやまちはわからない。でも、

ねがわくは我をかくれたる愆より解放ちたまえ。

13願くはなんじの僕をひきとめて故意なる罪をおかさしめず、



罪に支配されないように、

それをわが主たらしめ給うなかれ。さればわれ暇なきものとなりて、大なる愆をまぬかるるをえん。

14 エホバわが磐わが贖主よ、わがくちの言わがこころの思念なんじのまえに悦ばるることを得しめたまえ。」

義の神さまを相手にして歩んでいる。凄いことですよ。そんな思いがいたします。これが詩篇第19篇です。

●詩篇23篇

その次は詩篇23篇、これは皆さん愛読なさっていると思います。まず口語で読みます。

「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。

2 主はわたしを緑の牧場に臥させ、憩いの水際に伴われる。

3 主はわたしの魂を生き返らせ、御名のためにわたしを正しい道に導かれる。

4 たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、禍を恐れませんが、あなたにわたしと共におられるからです。あなたの鞭と、あなたの杖は、わたしを慰めます。

5 あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、わたしの首に油を注

がれる。わたしの杯は溢れます。

6 わたしの生きていく限りは必ず恵みと慈しみが伴うでしょう。わたしは

とこしえに主の宮に住むでしょう。」

文語訳では、

「1 エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。

2 エホバは我をみどりの野にふさせ、いこいの水濱にともないたもう。

3 エホバはわが靈魂をいかし、名のゆえをもて我をただしき路にみちびき給う。

この「名のゆえをもて」というのが大事です。「名のゆえ」、つまり、イスラエルの民族が正しい道歩んでいるなら、それはエホバの名にかけて。別な言い方をしますと、

「私はあなたたちの神である。あなたたちは私を神としている以上、それにふさわ

しい存在者であれよ」

ということ。出エジプト記にある十戒は、レビ記にきますと、その十戒の最後にいつも、

たとえば、

「汝、殺すなかれ」

とありますが、これは本来、

「あなたは殺さない」

という断言命法なんです。「殺すなかれ」ではなく、

「あなたは殺すことはしない。殺人なんかしない。我は主なり」



と。「我は主なり」という言葉が付いている。

「私があなたたちの導き手、神であった。しかもエジプトから脱出させた実力をもつてあなた方を救いだしたその神ではないか。その私があなたたちの神であるなら、あなたたちは殺人なんかすることはありえない。そうだろう」

という。これが十戒の本来の意味だそうです。

「我は主なり」

とレビ記にちゃんとありますから。この、

「み名のゆえをもて」

というのがそういうことなんです。義なる神さま、ただ義しい神さまが引つ張っておられる、導いておられる。変なことをやったら、ガツンとやられる。それは愛の鞭だと。悔い改めれば、すぐに赦していただける。そして、常に御意にかなう生き方をさせてくださる。「人がどう思うか」ではない。

「神さま、あなたの御意にかなう生き方をさせてください」

という、そういう願いがある。でも、誰もできない。出来たようなかつこう恰好をすると偽善者になる。それがパリサイなんです。それに対してキリストは、

「おさなじ幼児のこころになれ」

と言われた。本当にキリストは素直にいろんな人をそのままの姿で受け容れられた。そして、マイナスは全部自分でひつかぶり、そしてプラスを与えてくださる。これがキリストです。ですから、ここに「エホバ」と書いてあるのは、「キリスト」と読み替えたらいい。

「キリストこそはわが牧者である。私は乏しいことはありません。キリストこそは私を緑の野、憩いの汀、いこみざわ牧場があつて青草が生い茂つて、谷の川があつてそこで水をいただく。キリストは私のたましいを生き返らせて、御名のゆえをもつて、ご自分の面目にかけて、私たちをただし道に導く」

と。イザヤ書にもそれが出てくる。全部、神の名にかけてと。さっき言いましたように、「私があなたたちの神である。あなたは変なことをやるはずがない。そうだろう」

と。そういう信頼、それがかかっている。それに応えるのが義なんです。「義」というのは、道徳上のことではない。神の御意をまつすぐに貫いているすがた。これが義なんです。御意がまっすぐに貫いている。

「あなたの御意が天におけるごとく、地にもならしめたまえ」

という、主の祈りがありますね。御意が天になつている。そのように、

「この地においても、私を通してならしめてください。この世界は義がありません。

けれども、義なき所にあなたの義を貫いてください」

と。それをキリストがやってくれました。無条件ではできません。我々罪びとのために、キリストは我々の不義を全部背負つて、そして、



「父よ、どうぞ、赦してやってください。彼らは自分のことがわからないでいるからです」（ルカ23・34）

と言って、キリストの義を私たちにくださる。私たちの不義を全部ひつかぶる。そして、身を棄ててくださる。それがキリストです。だから、

「^{みな}名のゆえをもて我をただしき^{みち}路にみちびき給う」というのは、

「御意が貫かれる路に導いてください」ということ。

4 たといわれ死のかけの谷をあゆむとも禍害^{わざわい}をおそれじ。なんじ我とともに在^{いま}せばなり。

「あなたが一緒にいてくださるから大丈夫です。どんな所を通つても、あなたさえいてくだされば大丈夫です」

と。皆さん、そういう信をお持ちですか。他の神さまでも何でもいいですよ。とにかく、

「自分は、人間なんてちっぽけなものだ。でも、このお方が捕まえているから、いや、このお方につかまれているから私は大丈夫だ。地震がこようが、津波がこようが、命を欲しければ持つていけ」

と。キリストは仰つたでしょ、

「この命を奪つて、それ以上何もできないやつを恐れなくていい。命を奪つた以上に、地獄へ投げ込む権威ある者を恐れよ」

と。そういうことをキリストは言われました。キリストは天上天下、本当にマイナスは全部ひつかぶつて、プラスは全部くださる。だから、この方と一緒に津波がこようが大丈夫だと。どうせ、この身体というのは永遠ではないのですから。この短い、悠久^{ゆうきゆう}の昔から比べたらせいぜい百年程度の人生の中に、キリストの生命がきたら、これは身体がどうなるうと、びくともしない。

むしろ、身体を脱ぎ捨てたら、輝いて羽ばたいて、天に昇つていく。そういう姿。これを私たちはみんないただいているんです。それを受けとらなかつたら、クリスチャンではない。クリスチャンというのは、

「キリストがそこまでしてくださった。ありがとうございます」と

といって受けとるだけなんです。「ありがとうございます」と、私はもうそれ以上は知らない。

私はイエスさまに対して、

「イエスさま、ありがとうございます、ありがとうございます」

だけです。有り難^{がた}い。有ることが難^{むずか}しい。普通、そういうことはあり得ない。あるのはとても難しい。それが今そこに有る。だから、「ありがとうございます」という。罪びとに生命をくださる。無条件にゆるしてくださる。



「あなたは100%、向こうへ行くのが決まっているぞ」

と。皆さん、就職できますか、天に。終活です。まあ皆さんはまだ若いからいいけれども、もう私なんかあと余命いくばくもないかも知れない。と言いなから、百を超えるかも知らんけれども、まだわかりませんけれども（笑）。でも、だいたい、そういうご年齢になつてくれば、もうこの世のことよりも、

「そのあとどこへ行くか、行く所を予約できているか、予約席はありますか？」

というんです。皆さんが行かれる所は素晴らしい所だから、ちゃんと予約しておかなければいかん。予約のキップは何ですか？ 聖霊なんです。聖霊という霊をいただいたら、その霊は私たちを向こうの世界へ引つ張つてくれる。それでないと、生まれながらの肉なるものは下へ落ちていく。天からのものをいただいたら、天へ行く。ちゃんと自然法則はそうなっている。天のものは天にと、

「カイザルのものはカイザルに。神のものは神に」

という言葉がありますね。だから、我々は、この地上の百年の生の間に、本当にキリストの霊をいただいて、キリストの霊が中うちにあれば、それがどんどん知らない間に成長している。そして、外なる殻がポロツと落ちたら、中うちなるものが輝いて天に昇っていく。それを持っていなかったら、死んでから、さあ急に行こうとしたって、

「ちよつと待っていてね」

と、しばらく何か中間状態に留まらされていて、そして、眩い光に耐え得るように霊が成長したときに、向こうへ行くらしいですよ。サンダーシングもそういうことを言っていますから。スエーデンボルクもそういうふう言っているらしい。ですから、やはり、みな法則がある。

「罪の払う報酬は死なり」

と。だから、皆さんはもうご自分がどうであろうと、そんなことはどうでもいい。

「キリストがくれた。ありがとうございます」

と、これだけなんです。我々は本当に、この地上を去る時にどこへ行くのかと。それを今からちゃんとやっておかないと、これは一番大事なことだと思ふんです。そして、お子さんとかその他の方々が心配しないでいいように、

「あんたらは心配せんでいいよ。わしはあんたらのことが心配なんだ。わしはもう行く所は決まっている。一等席が予約してある。あんたらは大丈夫か？」

と。もう私なんかは素晴らしい所へ行きますよ（笑）。皆さんだつて行きますよ。

「願うようになるよ」

と。キリストはそのとおりにやりましたよ。福音書を見てごらん。

「あなたは何をして欲しいか？」
と聞かれる。



「はい、目が見えるようにしてほしい」

「よし、そのとおりのなれ」

と。長血の女がキリストの衣の裾に触ったら、血の源が乾いた。必死の思いでキリストの衣の房に触るだけで、サツとキリストの生命は流れていったでしょ。

「あなたの願いのようになれ」

と、これがキリストのいつもの言葉ですよ。

「私に何をしてほしいか？」

「金もうけがしたい」

なんて。それはあかんわな（笑）。金持ちの話がありますね。倉にいっぱい貯めこんで、一生これで飲んで暮らそうと。

「馬鹿ものよ、あなたの命は今晩奪われたら、どないするんや」

と書いてます。とにかく、我々が願うような、

「あなたの願いのとおりになれ」

とキリストは言っておられる。私の本当の願いというのは何でしょうか。やはり、この地上の命には未練がありません。これはあなた（キリスト）がお決めになることです。でも、

「地上の命が終わったときに、本当のあなたの輝く世界、光あふれる世界、生命の

満ちた世界、もう病気もそういうものが何も無い、そういう世界へ行きたいです」

と。そうなんですよ。

私の妻が血液の病気で今から6年前に亡くなりました。病床に居りました時にいつも空を眺めて、雲を見てました。やはり自分の行く場所を思っていたのかもしれないという気がいたします。まあ非常に素直な魂でしたので。私は妻を6年前に送りました。その3年前には孫の翔君をやはり——生まれながらの筋ジストロフィーでした——それで22歳で向こうへ往きました。年齢は22歳ですけど、まだ子どもなんですね。病院の治療に耐えきれなくて、向こうへ往きました。向こうに妻も行っているし、孫も行っている。二人目の孫はその6歳ほど年下です。今度25歳になったのかな。母親は私の娘ですけども何かあると、

「翔ちゃんがやってくれた」

と必ず言います。たとえば、車椅子でどこかに行かなければならない時に、今まで雨が降っていたのがパツと止んでいる。乗って車が動きだすとまた降ってくる。そして目的地に着いたら、また止んでいる。

「あつ、翔ちゃんがやってくれた」

と必ずそう言っています。いやあ不思議だなと思つてね。

「あなたの信ずるとおりになる」

とキリストがよく言われた。娘も衡平君という二番目の孫も信じきっているから。信じき



っている者を裏切れないというのが神さまの、イエスさまのお心だと思います。本当に不思議ですよ、そういうことが実際あるんですね。

ですから、私たちのこの地上の空間、ここで生きてますけれども、これは天界とつながっているんです。天界ともう絶えず繋がっている。電波にしたってそうでしょ。あれも不思議な世界ですね。皆さんそれぞれのいろいろな携帯電話で電波を受けとっていて、全然混線しないというのも不思議なことです。本当に不思議だと思いませんか、皆さん。見えないうが、しかし、電波は飛び交っている。テレビもチャンネルを合わせたら映るでしょ。あれは本当に不思議だなと思っっているけれども。

神さまの霊の次元の世界というのは凄く不思議だと思う。あれが本当の実際界なんです。この見える世界は、現象界というのはその影みたくなものらしいですよ。ですから、本当の向こうのキリストがいらっしゃる次元、そこへ行けば、もう眩まばゆいような世界、しかも、愛なんです。愛が満ちあふれている、神讚美が満ちあふれている、そういう世界がある。私たちこの地上の百年というのは修行なんです。

「肉体を宿にしながら、そこで本当の愛を学びなさい。犠牲ということを学びなさい」

と。修行時代だと思っっています、私は。

「朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに芽生える」

とパウロは言いました。

「肉で蒔かれ、霊よみがえに甦よみがえる」

と、コリント前書16章に出ています。キリストが語ってくださった世界はリアリティなんです。ただ我々とはレベル、次元がちがいますから、別次元のものを持ち込まれたから、みんなそこで驚きあわてていた。でも、キリストは、

「これは徴しるしだ。それ自体を求めたらいかん」

と言われた。パンの奇蹟をなさった。五千人もの人を養われた。五つのパンと二匹の魚で、男ばかりで五千人以上を養われた。それは徴なんです。そういうものを通して、見えないリアリティな世界を顕されたのに、単にそのものを求めてやってきたというのが、あの当時の連中ですよ。ヨハネ伝4章に出ています。

「あなた方はパンが欲しくてやって来たのか。そうじゃないよ」

と。そういうふうに聖書に、ヨハネ伝でも何でも、書かれています。その奥に展開しているその次元を見ていかないと、そこに現れている現象だけを追っても何もならない。「夢よ、もう一度」で、その現象をつくりだそうとしたら、これは変な御利益宗教、霊力宗教の変てこなことになります。あれはシンボルですから。本もの世界の中に自分を入れていくということです。

「主よ、あなたさえ持つていれば、あなたと繋がっていれば、もう心配ありません。」



何も恐くない。大丈夫です」

と。詩篇をみたら、

「神が護り給う」

となんべんも出てきます。詩篇の時代も既に、

「その骨の一つだに砕けることなし」

なんて出てくる。詩篇23篇だったら、

「⁴たといわれ死のかけの谷をあゆむとも禍害をおそれじ。なんじ我とともに在せばなり。なんじの笞なんじの杖われを慰む。」

とある。「笞」というのは、先端に金属が付いているそうです。それで狼とか、羊を食い物にしようとしてやってくるやつを追い払うために、先に三角の金属が付いている。それでやれば動物を追い払える。「杖」というのは、

「あつちへ行つたからいかん、こつちだ、こつちだ」

と正しい路へ連れて行く役割をする。「笞」というのは狼をやつつける武器なんです。敵を追い払い、そして正しい路へと連れて行ってくださる。みどりの野、いこいの汀に連れて行ってくださる。それがこの詩篇23篇です。しかも、そのあとでは、敵前で宴会をもよおしてくださいさるということが書いてある。

「⁵なんじわが仇のまえに我がために筵をもうけ、わが首にあぶらをそそぎた

もう。わが酒杯はあふるるなり。」

「あぶらをそそぐ」というのは、祝福のしるしです。私自身が杯となって、その杯があなたの恵みであふれますという。

⁶わが世にあらん限りはかならず恩恵と憐憫とわれにそいきたらん。我はどこしえにエホバの宮にすまん。」

生きている限り、あなたの恵みと憐れみが私を追いかけてきて捕まえてしまいます。どんなに逃げようとしたって、恵みと憐れみの方が追いかけてきて捕まえて離さないよ。

「ああ、ありがとうございます。私はどこしえにあなたと一緒に暮らしていくんです」

と。「エホバの宮」、神殿というもので表していますけれども、キリストご自身が神殿なんです。我々自身が宮なんですから、我々の中にキリストが聖霊となって宿ってくださる。まあ、新約的にいえば、そういう世界です。それが23篇です。

●詩篇25篇

次は詩篇25篇です。まず口語訳の方を読んでもみます。

「主よ、わが魂はあなたを仰ぎ望みます。」

²わが神よ、わたしはあなたに信頼します。



どうか、わたしを辱めず、わたしの敵を勝ち誇らせないでください。
 3 すべてあなたを待ち望む者を辱めず、みだりに信義に背く者を辱めてくださ
 い。

4 主よ、あなたの大路をわたしに知らせ、あなたの道をわたしに教えてくださ
 い。
 5 あなたのまことをもって、わたしを導き、わたしを教えてください。

あなたはわが救いの神です。わたしは、ひねもす、あなたを待ち望みます。

6 主よ、あなたの憐れみと、慈しみとを思い出してください。

これは古から絶えることがなかったのです。

7 わたしの若き時の罪と咎を思い出さないでください。主よ、あなたの恵み
 のゆえに、あなたの慈しみにしたがって、わたしを思い出してください。」「

ここに「恵み」と「慈しみ」とあります。ヨハネ伝の第1章に、

「律法はモーセによって与えられたけれども、恩恵と真理はイエス・キリスト
 によってやってきた」（ヨハネ1・17）

と。それがヨハネ伝1章17節に出てきましょ。そういったことが思いだされますね、ここ
 を読んでみますと。次に、文語で読んでみます。

「ああエホバよわがたましいは汝をおおぎ望む。

2 わが神よわれなんじに依頼めり。ねがわくはわれに愧をおわしめ給うなかれ。

わが仇のわれに勝ち誇ることなからしめたまえ。

3 実になんじを俟ち望むものははじしめられず、

故なくして信をうしなうものは愧をうけん。

この「まこと」というのは、文語訳では信仰の「信」と書いてある。

4 エホバよなんじの大路をわれにしめし、なんじの径をわれにおしえたまえ。

詩篇の詩は対句が多い。同じことを別な言葉で表す。ここも「大路をしめし」「径をおしえ
 という。

5 我をなんじの真理にみちびき我をおしえたまえ。

汝はわがすくいひねもすの神なり。われ終日なんじを俟ち望む。

6 なんじのあわれみと仁慈とはいにしえより絶えずあり。

エホバよこれをおしえたまえ。

7 わがわかきときの罪とわが愆とはおもいいでたもうなかれ。

エホバよ汝のめぐみの故になんじの仁慈に従いて我をおもいいでたまえ。

「自分のただしきのゆえに」なんて言っていない。

「あなたの仁慈、あなたのためぐみ、それによりすがっています。私は自分の義だとか、
 そんなことはとうてい言える立場ではありません」



という、なにかそんな気がいたしますね、これを読んでいきますと。

8 エホバはめぐみ深くして直くましますせり。斯るがゆえに道をつみびとに教え、
9 謙るものを正義にみちびきたまわん。その道をへりくだる者にしめた
まわん。

この「謙る」というのが大事なんです。反対は、傲慢です。霊的傲慢、これはサタンです。キリストは本当に霊砕けた、魂の砕けたお方です。神さまの前に自分を本当に空っぽにして平伏しておられました。その姿です。

10 エホバのもろもろの道はそのけいやくと証詞とをまもるものには仁慈なり
真理なり。

11 わが不義はおおいなり。エホバよ名のために之をゆるしたまえ。
御名のゆえに、あなたの御名にかけて、私をゆるしてくださいと。

12 エホバをおそるる者はたれなるか。之にそのえらぶべき道をしめたまわん。
「おそれる」というのは、畏れかしこむという字「畏」を当てています。

13 かかる人のたましいは平安にすまい、その裔はくにをつぐべし。
「やすき」を「平安」と書いてます。

14 エホバの親愛はエホバをおそるる者とともにあり、
エホバはその契約をかれらに示したまわん。

15 わが目は常にエホバにむかう。エホバわが足を網よりとりいだしたもう可
ばなり。

16 願くは帰りきたりて我をあわれみたまえ。われ独りわびしくまた苦しみおる
なり。

ダビデの心の苦しみがここに出ていますね。

17 願くはわが心のうれいをゆるめ、我をわざわいより脱かれしめたまえ。

18 わが患難わが辛苦をかえりみ、わがすべての罪をゆるしたまえ。

19 わが仇をみたまえ、かれらの数はおとし。情なき憾をもてわれをにくめり。

20 わがたましいをまもり、我をたすけたまえ。われに愧をおわしめたもうなか
れ。我なんじに依り頼めばなり。

21 われなんじを待ち望む。ねがわくは完全と正直とわれをまもれかし。

22 神よすべての憂よりイスラエルを贖いいだしたまえ。」

ダビデは王様でしたから、自分のことを祈りながら、同時にまた民族のことを祈っている。そういう内容だと思います。

● 詩篇27篇

飛ばしたくないのが幾つもあるんですが、例えば、ここに印刷してありませんが、27篇。



「1 エホバはわが光、わが救いなり。われ誰をかおそれん。エホバはわが生命のちからなり。わが懼るべきものはたれぞや。……」

3 縦いいくさびと宮をつらねて我をせむるともわが心おそれじ。たとい戦おこりて我をせむるとも我になお恃あり。

4 われ一事をエホバにこえり我これをもとむ。われエホバの美しきを仰ぎその宮をみんながためにわが世にあらん限りはエホバの家にするまんとこそ願うなれ。

5 エホバはなやみの日にその行宮のうちに我をひそませその幕屋のおくにわれをかくし巖のうえに我をたく置きたもうべければなり。

6 今わが首はわれをめぐれる仇のうえに高くあげらるべし。この故にわれエホバのまくやにて歡喜のそなえものを獻げん。われうたをうたいてエホバをほめたたえん。……」

10 わが父母われをすつるともエホバわれを迎えたまわん。

こんな言葉が出てくるんですよ。

11 エホバよなんじの途をわれにおしえ、わが仇のゆえに我をたいらかなる途にみちびきたまえ。

私の仇がおりますので、だからこそ、私をあなたが平らかなる途、安らかなる途に導いてくださいと。それから、13節、14節が素晴らしい。

13 われもしエホバの恩寵をいけるもの地にて見るの恃なからましかば奈何ぞや。

もしも、あなたのいつくしみを、本当のあなたの世界で——この地上はだめだけれども——あなたの霊界において、そこであなたを拝み奉ることができ、その望みがなかったら、私はもう生きていてもしょうがありませんと。

14 エホバを俟望め、雄々しかれ、汝のこころを堅うせよ、必ずやエホバをまちなぞめ。」

こういう激励の詩ですね。それが27篇でした。

● 詩篇31篇

それから、31篇なんかも、素晴らしい。特にその中で5節、

「5 われ靈魂をなんじの手にゆだね」

これはキリストが最期に発せられた言葉でしょ。

「彼らをゆるしたまえ」

と言われて、そして、

「われ靈魂をなんじのみ手にゆだね」



と。そして息をひきとられた。ここから来ていると思います。

それから31篇で、私が若いときに、「ああ素晴らしいな」と思った言葉は15節です。

「¹⁵わが時はすべてなんじの手^{みて}にあり。」

私のあらゆる瞬間、瞬間は全部あなたのものです。聖手^{みて}の中に抱かれてあります。だから、大丈夫です。あなたの聖手が見つかまえて、必ず護り導いてくださいますからと。

「わが時はすべてなんじの手^{みて}にあり」

という言葉が出てきます。

●詩篇32篇

それから、32篇、これはダビデの悔改めの詩です。

「¹その咎^{とが}が許され、

ダビデは罪を犯した。部下を最前線へ送って、その部下の奥さんを自分^とが盗^とってしまった。それを預言者ナタンに責められて、ハッと悔改めたという。その詩篇だと言われている。その咎を許され、

その罪が

消しがたい罪が、

覆い消される者は幸いである。

これはもう我々にとっては十字架しかありません。

²主^きによって不義を負わされず、その霊に偽りのない人は幸いである。

³わたしが自分の罪を言い現さなかった時は、ひねもす苦しむうめいたので、

わたしの骨はふるび衰えた。

⁴あなたの御手が昼も夜も、わたしのの上に重かったからである。わたしの力は、

夏の日照りによって枯れるように、枯れ果てた。

⁵わたしは自分の罪をあなたに知らせ、自分の不義を隠さなかった。わたしは

言った、「わたしの咎を主に告白しよう」と。その時あなたはわたしの犯した

罪を許された。

告白しようと思っただけで、もう許していただいたという。

⁶このゆえに、すべて神を敬う者はあなたに祈る。大水の押し寄せる悩みの時

にも、その身に及ぶことはない。

⁷あなたはわたしの隠れ場であって、わたしを守って悩みを免^{まぬが}れさせ、救い

をもってわたしを囲まれる。

次の「わたしは」というのは主の言葉です。神さまからのお答えです。

⁸わたしはあなたを教え、あなたの行くべき道を示し、わたしの目をあなたに留めて、さとす。



9 あなたは悟りの無い馬のようであってはならない。また騾馬ろまのようであってはならない。彼らは轡くつわ、手綱たづなをもって押さえられなければ、あなたに従わない。

10 悪しき者は悲しみが深い。しかし、主に信頼する者は慈しみで囲まれる。

11 正しき者よ、主によって喜び樂しめ、すべて心の直き者よ、喜びの声を高くあげよ。」

これを文語訳の方で読んでみます。

「その愆とがをゆるされその罪をおおわれしものは福さいわいなり。

2 不義をエホバに負わせられざるもの、心にいつわりなき者はさいわいなり。

3 我われいあらわさざりしときは終日ひねもすかなしみさけびたるが故にわが骨ふるびおとろえたり。

4 なんじの手はよるも昼もわがうえにありて重し、

わが身の潤澤うるおはかわりて夏の早ひつひのことくなれり。

5 斯ごとてわれなんじの前にわが罪をあらわしわが不義をおおわざりき。

我われいらくわが愆とがをエホバにいいあらわさんと。斯ごとるときしも

今はそうと思つても、その時に、

汝おれわがつみの邪曲よこしまをゆるしたまえり。

こういう体験がある。だから、

6 されば神をうやまう者はなんじに遇あひまうことをうべき間になんじに祈らん。

大水あふれ流るともかならずその身におよばじ。

7 汝はわがかくるべき所なり。

隠れ家だと。

なんじ患難なやみをふせぎて我をまもり、救のうたをもて我をかこみたまわん。

そして神の言葉、

8 われ汝をおしえ汝をあゆむべき途みちにみちびき、わが目をなんじに注つぎてきとさん。

9 汝等わきまえなき馬のごとく驢馬ろまのごとくなるなかれ。かれらは轡くつわたづなのごとき具ぐをもてひきとめずば近づききたることなし。

無理やりにするのではない。心から慕い求めて私の所に来なさいと。

10 悪者あしきものはかなしみ多かれどエホバに依頼よりたのむものは憐憫あわれみにてかこまれん。

11 ただしき者よエホバを喜び樂しめ。凡て心の直きものよ喜びよばうべし。「これが32篇でした。」



● 詩篇33篇

それから今度は33篇。これは本当に神讚美が出てくるから、ここに引用したんです。まず口語訳の方で読みます。

- 「1 正しき者よ、主によって喜び、讚美は直き者にふさわしい。
 2 琴をもつて主を讚美せよ、十弦の立琴をもつて主を褒め称えよ。
 3 新しい歌を主に向つて歌い、喜びの声を挙げて巧みに琴をかきならせ。
 4 主の御言葉は直く、その全ての御業は眞実だからである。
 5 主は正義と公平とを愛される。地は主の慈しみで満ちている。」
 そこまでを文語の方で読みますと、

「1 ただしき者よエホバによりてよろこべ。讚美はなおきものに適わしきなり。
 「人生は神讚美！」はここからとつたんですよ、「讚美はなおきものに適わしきなり」と。

2 琴をもつてに感謝せよ十絃のことももてエホバをほめうたえ。

3 あたらしき歌をエホバにむかいてうたい、歡喜の声をあげてたくみに琴をかきならせ。

4 エホバのことばは直くそのすべて行いたもうところ眞実なればなり。

5 エホバは義と公平とをこのみたまう。その仁慈はあまねく地にみつ。

6 もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口の氣によりてつくられたり。」

この6節が素晴らしい言葉ですね。口語訳では、

「もろもろの天は主の御言葉によって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた」

と。ヨハネ伝の初めに、

「太初に言ありき。言は靈なり」

とあるでしょ。

「すべてその御言でこの世のものはできあがつてきた」

というのがヨハネ伝の第1章に出てきます。それを思わせる箇所です。

「もろもろの天は主の御言葉によって造られた」

という。この「もろもろの天」という言葉は、さっきの19篇にもでてきましたが、やはり霊界にはいろいろな段階がある。至高天、一番高い霊界の天へ行くまでにいろいろな段階がある。そういうふう考えたんですね。

サンダーシングなんか同じようなことを言っている。天はたくさんある。その一番の至高天にキリストはいらっしゃると。それぞれの段階にふさわしく魂が潔められていくに従って、そちらへ近づいていく。眩い世界だそうです。だから、日頃からキリストさまに、神さまに親しんでいない人間は、いきなりそこへ行ったら、眩くて目がつぶれそうになる。



それに馴^なれていなければいけない。

皆さんは大丈夫です。もうここで既にトレーニングを積んでおられるから、サーツと行ける。行けない人に、

「あばよ、待つているよ」

と、そういう世界。これは誤魔化しがきかないそうです。ですから、皆さんは幸いなんですよ。もう今から天にいらつしやつているからね。だから、

「ご臨終です」

なんて言うが、ご臨終ではなく、向こうへ行くんだから、

「ご出発です！」

と言うべきですよ（笑）。

「さあ、ご出発ですよ、バンザイ！」

と。いや本当にそうではないですか。私はそんな気持ちです、「バンザイ！」と。このキリストをいただいたら、もの凄く積極的な人生観というかな、向こうは本当に開けていると。

「外なる人は破るれども、内なる人は日毎に新たなり」

と、どンドンどンドン輝いていくという。「光輝高霊者」というのはそういうものなんです。高次の霊、高次元の霊。光り輝く高い次元の霊の者です。キリストはこういう者に私を創^{つく}り変えてくださった。

「ただ信じればすぐ向こうへ往ける」

なんて、そんな簡単なものではありません。やはりそれに相^{ふさわ}しい姿に変えられていかなくては。そうでしょ。それは、あのキリストの十字架の片一方の所に居った盗賊に、

「なんじ我と共にパラダイス！」

とキリストは言われたけれども、そんな簡単に行けません。やはり、「汝はパラダイス」と言われたって、そこでだんだん霊が高められていかないと向こうへ行けないはずですよ。あれはキリストはちよつとおま^まけで言われたように思いますよ。やはり、皆さんがだんだんだんだん、

「外なる人は破るれども、内なる人は日毎に新たになるなり」

と、光り輝いて行って、光の国に相^{ふさわ}しくなるわけでしょ。闇に相^{ふさわ}しい人は闇の所へ行くわけです。それぞれ相^あ応しい所へ行く。だから、日頃から、「朱に交われれば赤くなる」という。

「人は播^まいた種を刈り取る」

とガラテヤ書に出てきます。本当に全部、そのとおりなんです。

「肉に播^まく者は肉から滅びを刈り取り、霊に播^まく者は霊から生命を刈り取る」

（ガラテヤ6・8）

とガラテヤ書6章に出てきます。全部もう本当の世界ですわ、公平です。本当に公平です。



まあそういうことを思います。だから、皆さんは本当に幸いなんですよ、こういうものを求めていらつしやるからね。

「6 もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口の氣いきによりてつくられたり。

7 主は海の水を水がめの中に集めるように集め、深い淵ふちを倉におさめられた。

8 全地は主を畏おそれ、

「おそれ」という字は、畏敬の念という「畏れ」という字を書きます。口語訳の「恐れ」は嫌です。主を恐がるのではない。主を畏れかしこむ。平伏ひれふしの心、砕けの心です。しかし、「主さま」といつて親しく呼びまつる。そういう気持ちがこの「畏れ」です。

世に住む全ての者は主を畏おそれかしこめ。

9 主が仰おほせられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである。

創世記の初めがそうです。「光あれ！」と言われて、光があった。全部、御言みことばによって成つて行ったという。創世記の初めに出てきますね。

10 主はもろもろの国のはかりごとを空しくし、もろもろの民の企てをくじかれる。

国際情勢もそうであつてほしいですよ。本当にそう思います。

11 主のはかりごととはとこしえに立ち、その御意みこころの思いは世々に立つ。

12 主をおのが神とする国は幸いである。

さあ、わが日本はどうだったか。何をおのが国の神としてきたか、と私は思つてしまう。「主をおのが神とする国は幸いである」という。ミカ書にも出てくる。それぞれの民族は自分のそれぞれの民族の神を拝んでいる。けれども、我々はエホバの名によつて歩んでいる。ミカ書5章に出てくる。それぞれの民族は神を持つてますよ。けれども、その神さまがどのレベルの神さまかが大事なんです。その点では、イスラエルはやはり凄いわ。本当にそう思います。

主がその嗣業ゆづりとして選ばれた民は幸いである。

この選民意識が強すぎると、今度は独善的に陥りますから、これは気をつけなければいけないけれども。謙虚に、「こんなつまらんやつを選んでくださった」と。「項強うなじこわき民をあえて選ばれた」とちゃんと書いてある。ステパノはそう言ってます。

13 主は天から見下ろされ、すべての人の子らを見、

14 そのおられる所から地に住む全ての人を眺められる。

15 主はすべて彼らの心を造り、その全ての業わざに心を留められる。

アメリカが、「宇宙衛星から地上の写真を撮つたら、北朝鮮の何々施設がこうだった」とやつていてでしょ。あんなことができるんだから、ましてや神さまはみんなを御存知なのは当たり前ではないですか。そういう感じがする。次もおもしろいですよ。



16 王はその軍勢の多きによって救いを得ない。勇士はその力の大きいによって助けを得ない。

17 馬は勝利に頼みとならない。その大なる力も人を助けることはできない。見よ、主の目は主を畏れる者の上に在り、その慈しみを望む者の上に在る。

詩篇8篇に、

「なんじは嬰兒おさなごちのみごの口により力の基もとをおきて敵にそなえたまえり」（詩篇8・2）

と出てくる。キリストも引用された。

「幼児、嬰兒、それが強いんだよ」

という言葉が詩篇8篇とキリストの言葉にありますように、軍勢が多いからそれで頼みになるわけではない。力が強いからそれで頼みになるわけではない。馬なんて当てにならない。

19 これは主が彼らの魂を死から救い、飢饉の時にも生きながらえさせるためである。

20 われらの魂は主を待ち望む。主はわれらの助け、われらの盾である。

21 われらは主の聖なる御名に信頼するが故に、われらの心は主にあつて喜ぶ。

22 主よ、われらが待ち望むように、あなたの慈しみをわれらの上に垂たれてください。

なかなか、この33篇も素晴らしい詩でしょ。

●詩篇34篇

それから、34篇。これもやはり素晴らしい。

「ダビデ、アビメレクのまえにて狂あさまえる状をなし逐おわれていできりしときに作れるうた」

とある。たしか、こういう姿を見て、奥さんがダビデをものすごく軽蔑したということが書かれています。しかし、34篇は素晴らしい

「わたしは常に主を褒ほめまつる。その讚美はわたしの口に絶えない。

2 わが魂は主によって誇る。苦しむ者はこれを聞いて喜ぶであろう。

3 わたしと共に主をあがめよ、われらは共に御名を褒ため称えよう。

4 わたしが主に求めたとき、主はわたしに答え、すべての恐れからわたしを助け出された。

5 主を仰ぎ見て、光を得よ、そうすれば、あなたがたは、恥じて顔を赤くすることはない。

6 この苦しむ者が呼ばわった時、主は聞いて、全ての悩みから救い出された。

7 主の使いは主を畏れる者のまわりに陣を敷いて彼らを助けられる。



8 主の恵みの深きことを味わい知れ、主に寄り頼む人は幸いである。

9 主の聖徒よ、主を畏れよ、主を畏れる者には乏しいことがないからである。

10 若き獅子は乏しくなつて飢えることがある。しかし主を求める者は良き物に欠けることはない。

11 子らよ、来てわたしに聞け、わたしは主の恐るべきことをあなたがたに教えよう。

この「恐れる」は恐がるではなく、畏敬の念の「畏れる」を当てていただきたいと思います。これは文語の聖書がこの「畏」の字を当てています。

12 幸いを見ようとして、いのちを慕い、長らえることを好む人は誰か。

13 あなたの舌を押さえて悪を言わせず、あなたの唇を押さえて偽りを言わすな。

この言葉はヤコブ書に出てきます。

「自分の口を、舌を制する人は立派なものだ」

と書いてます。口というのは、ある時はそれで神さまを讚美しているかと思うと、ある時は人を罵つている。たった一つの口がいろんなことをやっている。他は、耳は二つあったり、目は二つあるけれども、口はたった一つで食べたり飲んだりしゃべったりいろいろやるのに、その口が怪しからんことをやりそうだというようなことがヤコブ書に出てきてますから、おもしろいですよ。

14 悪を離れて善を行い、和らぎを求めて、これを務めよ。

15 主の目は正しい人を顧み、その耳は彼らの叫びに傾く。

この「正しい人」というのが度々出てくるけれども。人間は、頑ななる人間が「ただしい」なんて言えたものではない。我々は主の十字架で贖われて、本来罪びとである我々が、主の十字架の贖いの故に聖なる霊をいただいて、義しい者にされた。どこまでも、我々は平伏しの霊、砕けの魂でなければならぬ。「私は自然的に義しい」なんて言える人は一人もない。

「義人なし一人だになし」

という、それが本来の姿です。その当たりがちよつと詩篇は楽天的な所があります。

16 主の御顔は悪を行う者に向かい、その記憶を地から断ち滅ぼされる。

17 正しい者が助けを叫び求める時、主は聞いて、彼らをその全ての悩みから助け出される。

ここは文語では、「たすけだされた」と書いてある。

17 義者さげびたれば之をききてそのすべての患難よりたすけいだしたまえ

り」と、完了形で書いてある。やはり、そうだと思う。

「これからそうなさいますよ。今までそうだったから、これからもなさいます」



と、それも言えるけれども。まず助けたという事実があつて、その上で、「こうされるにちがいない、そうであつてほしい」と。

「義しい者が叫び求めたときに主は聞いて、彼はそのすべての患難から助けだされ
た」
ということ。

18 主は心の碎けた者に近く、魂の悔いせずおれた者を救われる。

19 正しい者には災いが多い。

この「正しい者」とは、「主を求めている者」です。ストレートに正しいなんて、人間はいえませんが。神を求める魂、主によりすぎる魂、そういう者には災いが多い。

しかし、主はすべてその中から彼を助け出される。

20 主は彼の骨をことごとく守られる。その一つだに折られることはない。

21 悪は悪しき者を殺す。正しい者を憎む者は罪に定められる。

22 主はその僕らの命を贖われる。主に寄り頼む者は一人だに罪に定められること
はない。」

凄い断言でしょ。そういうことで、なかなか34篇は力強い詩だから、載せました。

●詩篇36篇

その次は36篇、これはダビデのうた。5節から、

「5 主よ、あなたの慈しみは天にまで及び、あなたの真は雲にまで及ぶ。

美しいですね、「天にまで及び、雲にまで及ぶ」「慈しみと真」と、対句になっている。

6 あなたの義は神の山のごとく、あなたの裁きは大きな淵のようだ。

これは審判の裁きです。

主よ、あなたは人と獣とを救われる。

しばしば、獣とか生き物が出てくる。人間と同じように生き物を守ってくださるという。決して「自然を征服する」という観念は全然、詩篇には出てきませんよ。よく学者は、

「日本は自然に親しんで、ヨーロッパは自然を征服する」

なんてことを言いますけれども、少なくとも聖書の世界は、詩篇を見ましたら、そんなものは全然ない。むしろ、自然に親しむ、自然に溶け込む。そういう意味では、我々大和民族と似ている所があると思う。

7 神よ、あなたの慈しみはいかに尊いことでしょう。人の子らはあなたの翼の
蔭に避け所を得、

8 あなたの家の豊かなのよによって飽き足りる。あなたはその楽しみの川の水を
彼らに飲ませられる。

9 命の泉はあなたのもとにあり、われらはあなたの光によって光を見る。



これは文語では、「そは」というのが付いている。というのは、その前の文章が、
 「7神よなんじの仁慈はとおときかな。人の子はなんじの翼の蔭にさげどころを得、

8なんじの屋のゆたかななるによりてことごとく飽くことをえん。なんじはその
 歡樂のかわの水をかれらに飲ましめたまわん。

9そはいのちの泉はなんじに在り。われらはなんじの光によりて光をみん。」
 とあります。

10どうか、あなたを知る者に絶えず慈しみを施し、心の直き者に絶えず救いを
 施してください。

この「救い」も文語では、

「10ねがわくはなんじを知るものにたえず憐憫をほどこし、心なおき者にたえ
 ず正義をほどこしたまえ」

「正義」を「ただしき」とふりがなを振ってあります。口語では「慈しみと救い」です、文
 語では「憐憫と正義」となっています。

11高ぶる者の足がわたしを踏み、悪しき者の手がわたしを追い出すことを許さ
 ないでください。

12悪を行う者はそこに倒れ、彼らは打ち伏せられて、起き上がることはできな
 い。」

ちよつと文語の方で読んでみます。

「5エホバよなんじの仁慈は天にあり。なんじの眞実は雲にまでおよぶ。

「仁慈と眞実」。ヨハネ伝一章に、「恩恵と眞実」が出てきましたね。

6汝のただしきは神の山のごとくなんじの審判はおおなる淵なり。エホバよ
 なんじは人とけものとを護りたもう。

7神よなんじの仁慈はとおときかな。人の子はなんじの翼の蔭にさげどころ
 を得、

8なんじの屋のゆたかななるによりてことごとく飽くことをえん。なんじはその
 歡樂のかわの水をかれらに飲ましめたまわん。

宗教の世界というのは、なにかやせ細つてガリガリになるということは出てこない。豊
 かなんです。実に豊かです。宗教の世界で一番いけないのは、エゴなんです。自己執着
 神を求めないで自己を求める。神を求めるのも、己の幸せのために神さまを使いものにする。
 これが罪なんです。聖書だったら、

「神が神でありますように。私はあなたの僕です」

という、その平伏しなんです、砕けなんです。その砕けの魂を主は喜び給う。

「さいわいなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」



という、あの姿なんです。

『そはいのちの泉はなんじに在り。われらはなんじの光によりて光をみん。』

「いのちの泉」というと、直ちに思い出すのはヨハネ伝4章です。あの井戸の所でサマリヤの女にイエスは、

「この水を飲む者はまた渇く。しかし、私が与える水を飲む者は渇くことがない。その人の中からのちの水が湧き出る」

ということを言われました。サマリヤの女は、

「あなたは汲む物を持つてないのに、バケツも持つてないのに、どないしてそんな水をくれるんですか」

なんて、そういう問答が出てきましたよ。その「いのちの泉」です。キリストは生命の泉。今度は、私たちが生命の泉になるんですよ。ヨハネ伝の4章11節、サマリヤの女とイエスとの問答、

「女いう『主よ、なんじは汲む物を持たず、井は深し、その活ける水は何処より得しぞ。』¹²汝はこの井を我らに与えし我らの父ヤコブよりも大いなるか、彼も、その子らも、その家畜も、これより飲みたり」¹³イエス答えて言い給う

『すべて此の水をのむ者は、また渇かん。』¹⁴然れど我があたうる水を飲む者は、永遠に渇くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』

と。イエスは、

「この井戸水を飲んだって、やはり喉は渇くさ。やがてやはり死ぬ。しかし、私が与える水はその人の中で生命の水が沸き上がってくる。死なないんだ。永遠の水が湧き出づる」

と。しかも、

「その水はその人限りではない」

ということが、その先のヨハネ伝7章に出てくる。過越の祭の終わりの日、

「³⁷祭の終の大なる日にイエス立ちて呼ばわりて言いたもう『人もし渇かば我に來りて飲め。』³⁸我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、

川となりて流れ出づべし』

これに注釈を加えて、

³⁹これは彼を信する者の受けんとする聖霊を指して言い給いしなり。イエス末だ栄光を受け給わざれば、御霊いまだ降らざりしなり。」（ヨハネ7・37〜39）

と。そう書いてある。でももう、イエスは栄光を受けてくださった。そしたら、私たちはキリストを飲んでいくと、私たちの中から聖霊の水が流れていくはずなんです。それは世の人を、世の中を潤していく。そういう一人びとりなんですよ、クリスチャンというのは。



凄いでしょ。御意みこころなんです、それが。御意が必ずなるんです、我々が「はいっ」といえば。「そんなバカなことがありますか、私はちつぽけな人間でだめですわ」なんてことを言ったらあかん。

「おおきに、ありがとうございます、ごちそうさんです」

と。全部、「はいっ」と言っつて、素直に受けとる。そうすると、御言どおりにはたらいていく。そういう世界です。だから、

「幼児おとこのごとくならなければ」

という。ですから、詩篇を読んでもしても、やはりヨハネ伝とかそういう所へスツと帰つてしまふんです、私は。キリストも非常に詩篇を愛されましたね、

「詩篇にこういうことが書いてある」

ということをおっしゃるから。

また、詩篇36篇に帰りまして、

「⁹そはいのちの泉はなんじに在り。われらはなんじの光によりて光をみん。

¹⁰ねがわくはなんじを知るものにたえず憐憫あわれみをほどこし。心なおき者にたえず

正義ただしきをほどこしたまへ。

¹¹たかぶるものの足われをふみ悪あしきものの手われを逐おい去はらうをゆるし給う

なかれ。

¹²邪曲よこしまをおこなう者はかしこに仆たおれたり。かれら打伏うちふせられてまた起たつこと

あたわざるべし。」

やはり詩篇の世界は、

「悪いやつは徹底的にやつつけてください」

と、それで終わっている。そこをキリストは突き抜けて、

「彼らをひっくり返して、人間をひっくり返して、それから敵のために祈れ」

という、そこへ突き抜けたのがキリストの素晴らしい所です。詩篇はそこまではいかない。それはしようがない。

●詩篇37篇

この37篇と対になっているのが73篇です。覚えやすい。37と73ですから。この二つをセツトにしていただきたいと思えます。37篇は、良心的な人、氣息奄々えんえんとして働いている人、正直者はバカをみるといつて嘆いている、そういう人に対して、

「そうじゃない、そうじゃない。あなたは顧みられている。大丈夫、大丈夫だ」

という、応援歌なんです。そういう気持ちで書かれている。この世の中をみてください。今はどうかしりません。昔から、正直者はバカをみるとか、ペコペコペコペコしてごまかしているやつはどんどん栄えて出世していく。上司に正しいことを言うと、ポーンと左遷



させられて、「あいつは邪魔になるからあっちへ行け」とか。まあそういう世界で苦しんでいる人がたくさんいるわけですよ。それから、同僚のあいだで出世競争して引きずりおろされる。それで何が救いか。

「人を相手にするな。神さまだけを見ている。そうしたら、今は栄えているようなやつは、そのうちに居らんようになる。ふんぞり返っていたやつは居らんようになる。がんばれよ」

という応援歌なんです。そういう気持ちで——ええ三千年前ですよ——そういう詩がうたわれている。そういう角度から、この詩篇を読んでみます。

「悪をなす者のゆえに、心を悩ますな。

「悪をなして栄えているやつは悔しいではないか」という人に、「そんなことに心を悩ますな。あんのは放っておきなさい」という慰めですね。

不義を行う者のゆえに妬み^{ねた}を起こすな。

妬みなんです、「悔しい。あの野郎は出世しやがって」と。奥さんが「あの人は今度、課長になりました。あんたはいつまでも係長やんか」と、そういう場合がよくありますよね。

悪をなす者のゆえに、心を悩ますな。不義を行う者のゆえに妬み^{ねた}を起こすな

と。「赤提灯^{ちやうちん}ばかりがあんたの行く所ではないよ」と。

2 彼らはやがて草のように衰え、青菜のようにしおれるからである。

3 主に信頼して善を行え。そうすれば、あなたはこの国に住んで、安きを得る。

「この国」というのは神さまの国です。

4 主によって喜びをなせ。主はあなたの心の願いを叶^{かな}えられる。

5 あなたの道を主に委ねよ。主に信頼せよ、主はそれを成し遂げ、

6 あなたの義を

あなたの正しさを——あなたは間違っていない——それを、

光のように明らかにし、あなたの正しいことを真昼のように明らかにされる。

7 主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め。おのが道を歩んで栄える者のゆ

えに、悪いはかりごとを遂げる人のゆえに、心を悩ますな。

「放っておけ、あんなやつは。あんなやつを見てたらあかん。あんた自身がみすばらしくなるから、そんなやつは放っておけ。神さまだけを見ていけ」と。

8 怒りをやめ、憤^{うき}りを捨てよ。

社会的義憤というやつです。それを捨てると。

心を悩ますな、これはただ悪を行うに至るのみだ。

9 悪を行う者は断ち滅ぼされ、主を待ち望む者は国を継ぐからである。

10 悪しき者はただしばらくで、失せ去る。あなたは彼の所をつぶさに尋ねても

彼はいない。



11 しかし柔和な者は国を継ぎ、
これは文語では、「謙へりくだるもの」と書いてますね。

豊かな繁栄を楽しむことができる。

12 悪しき者は正しい者に向かつてはかりごとをめぐらし、これに向かつて齒がみする。

13 しかし主は悪しき者を笑われる、

「主が笑われる」というのは二カ所ぐらいしか出てこない。「主は悪しき者を笑われる」という。

彼の日が来るのを見られるからである。

やがて彼らは没落するからであると。

14 悪しき者は剣を抜き、弓を張って、貧しい者と乏しい者とを倒し、直く歩む者を殺そうとする。

15 しかしその剣はおのが胸を刺し、その弓は折られる。

16 正しい人の持ち物の少ないのは、多くの悪しき者の豊かなのに勝るまさ。

17 悪しき者の腕は折られるが、主は正しい者を助け支えられるからである。

18 主は全き者のもろもろの日を知られる。彼らの嗣業しぎよはとこしえに続く。

19 彼らは災いの時にも恥を被らず、飢饉の日にも飽き足りる。

20 しかし、悪しき者は滅び、主の敵は牧場の栄えの枯れるように消え、煙のよ

うに消え失せる。

21 悪しき者は物を借りて返すことをしない。しかし、正しい人は寛大で、施し与える。

22 主に祝福された者は国を継ぎ、主にのろわれた者は断ち滅ぼされる。

その次が素晴らしいです。

23 人の歩みは主によって定められる。

自分で歩んでいるようだけれども、そうじゃない。主があなたの道を導いておられる。主はあなたの導き手だと。

主はその行く道を喜ばれる。

主が喜んでくださっているわけではないか。人を見ないで主だけを見て行こうと。

24 たといその人が倒れても、全く打ち伏せられることはない、主がその手を助け支えられるからである。

ペシヤンコになることはない。倒れることはあるよ、でも、立ち上がらせてくださる。ただでは起き上がらない、たくましくなつて起き上がるよと。パウロがそうですものね。あのパウロの味わった散々な苦難。それを克服してきた。あれは素晴らしい。

25 わたしは、昔、年若かった時も、年老いた今も、正しい人が捨てられ、ある



いはその子孫が食物を乞い歩くのを見たことがない。

26 正しい人は常に寛大で、物を貸し与え、その子孫は祝福を得る。

27 悪を避けて善を行え。そうすれば、あなたは永久に住むことができる。

28 主は公義を愛し、その聖徒を見捨てられないからである。正しい者は永久に助け守られる。しかし、悪しき者の子孫は断ち滅ぼされる。

29 正しい者は国を継ぎ、永久にその中に住むことができる。

30 正しい者の口は知恵を語り、その舌は公義を述べる。

31 その心には神の掟おきてがあり、その歩みは滑ることがない。

32 悪しき者は正しい人をうかがい、これを殺そうと計る。

33 主は正しい人を悪しき者の手にゆだねられない。また裁かれる時、これを罪に定められることはない。

34 主を待ち望め、その道を守れ。そうすれば、主はあなたを上げて、国を継がせられる。あなたは悪しき者の断ち滅ぼされるのを見るであろう。

35 わたしは悪しき者が勝ち誇って、レバノンの香柏のように簞そびえたつを見た。

36 しかし、わたしが通り過ぎると、見よ、彼は居なかった。わたしは彼を尋ねたけれども見つからなかった。

37 全き人に目を注ぎ、直き人を見よ。穏やかな人には子孫がある。

38 しかし罪を犯す者どもは共に滅ぼされ、悪しき者の子孫は断たれる。

39 正しい人の救いは主から出る。主は彼らの悩みの時の避け所である。

次の詩篇46篇がそうです、「神は我らの避け所」という。

40 主は彼らを助け、彼らを解き放ち、彼らを悪しき者どもから解き放って救われる。彼らは主に寄り頼むからである。

●詩篇46篇

これも有名な所です。ルターの宗教改革の時の心の拠り所にした詩です。

「神は我らの避け所、また力である。悩める時のいと近き助けである。

2 このゆえに、たとい地は変り、山は海の真中まなかに移るとも、我らは恐れない。

3 たといその水は鳴りとどろき、泡立つとも、その騒ぎによつて山は震え動くとも、我らは恐れない。

4 一つの川がある。その流れは神の都を喜ばせ、いと高き者の聖なる住まいを喜ばせる。

5 神がその中に居られるので、都は揺るがない。神は朝早くこれを助けられる。

6 もろもろの民は騒ぎたち、もろもろの国は揺れ動く。

そういう世界情勢。



神がその声を出されると地は溶ける。

7 万軍の主は我らと共に居られる、ヤコブの神は我らの避け所である。

8 来て、主の御業を見よ、主は驚くべき事を地に行われた。

9 主は地の果てまでも戦いを止めさせ、弓を折り、槍を断ち、戦車を火で焼かれる。

まだこれは実現しておりません、残念ながら。

10 「静まつて、わたしこそ神であることを知れ。わたしはもろもろの国民のうちにあがめられ、全地にあがめられる」。

11 万軍の主は我らと共に居られる、ヤコブの神は我らの避け所である。」

素晴らしい詩でしょ。

●詩篇57篇

これも素晴らしい所です。57篇の7節から読みましょう。

「7 神よ、わたしの心は定まりました。わたしは歌い、かつ褒め称えます。

8 わが魂よ、覚めよ。立琴よ、琴よ、覚めよ。わたしはしのめを呼び覚まします。

9 主よ、わたしは諸々の民の中であなたに感謝し、諸々の国の中であなたを褒め称えます。

10 あなたの慈しみは大きく、天にまで及び、あなたの真は雲にまで及びます。

「慈しみは天にまで及び、真は雲にまで及び」という対句でしょ。

11 神よ、みずからを天よりも高くし、御栄を全地の上へ上げてください。」

素晴らしい讚美です。

●詩篇62篇

それから62篇、これもダビデのうたです。

「1 わが魂は黙してただ神を待つ。わが救いは神から来る。

2 神こそわが岩、わが救い、わが高き櫓である。わたしは甚く動かされることはない。

3 あなたがたは、いつまで人に押し迫るのか。あなたがたは皆、傾いた石垣のように、揺れ動くまがきのように人を倒そうとするのか。

4 彼らは人を尊い地位から落とそうとのみ計り、偽りを喜び、その口では祝福し、心の内では呪うのである。

5 わが魂は黙してただ神を待つ。わが望みは神から来るからである。

6 神こそわが岩、わが救い、わが高き櫓である。わたしは動かされることは



ない。

7 わが救いとわが誉れとは神に在る。神はわが力の岩、わが避け所である。そして、一転して、民へ向かつて言っている。ダビデは王様ですから。

8 民よ、いかなる時にも神に信頼せよ。

これが大事です。いかなる時でも、時がよくてもわるくても、どんな情勢であっても、とにかく、いかなる時にも神に信頼せよ。

その御前みまえにあなたの心を注ぎ出せ。神は我らの避け所である。

9 低い人は空しく、高い人は偽りである。彼らを秤はかりに置けば、彼らは息よりも軽い。

10 あなたがたは、虐げしいたに頼ってはならない。かすめ奪うことに、空しい望みを置いてはならない。富の増し加わるとき、これに心をかけてはならない。

11 神はひとたび言われた、わたしは再びこれを聞いた、力は神に属することを。

12 主よ、慈しみもまた、あなたに属することを。あなたは人おのの業わざに従って報いられるからである。」

●詩篇63篇

それから、63篇。これも3節から見てください。

「³あなたの慈しみは命にも勝るゆえ、

たいてい、

「命あつてのもの種。命以上の大事なものはない」

と、これはある面では当たっている。でも、その命以上の大事なものがありませんよと。これがまた聖書の伝えたいことなんです。地上の命だけがすべてではない。そこは日本の教育は限界があります。

日野原さんだつて、「命、命、命」と言うけれども、本当の天上の生命のことを公にはなにか語っておられないみたいですね。クリスチャンの中では語っておられるんでしょうけれども、一般向けには、「命、命、命」と言っておられる。私はそれが残念だと思います。命よりも大事なものがある。しかし、この命を無駄にしてはならない。両方大事なんです。無駄にしてはならないけれども、その命よりもまさるものと素晴らしいものがある。それをキリストは示してくださった。

「そのキリストを持つならば、身体は滅びようと、栄光の姿で神のみもとに羽ばたいて行くんだ」

と、それをやはり叫んでほしいですね。それが、

あなたの慈しみは命にも勝るゆえ、わが唇はあなたを褒め称える。

4 わたしは生きながらえる間、あなたを褒め、手を挙げて、御名を呼びまつる。



56 わたしは床の上であなただを思い出し、夜の更けるままにあなたを深く思うとき、わたしの魂は髓と油とをもつてもてなされるように飽き足り、わたしの口は喜びの唇をもつてあなたを褒め称える。

これが讚美ですよ。人生は神讚美！ これですよね。

7 あなたはわたしの助けとなられたゆえ、わたしはあなたの翼の陰で喜び歌う。

8 わたしの魂はあなたにすがりつき、

これみたいに「主にすがりつく」んです。

あなたの右の手はわたしを支えられる。

「右の手」というのは力ある手、「ライトハンド」なんです。「ライト」というのは、「正しい」と「力」と両方表している。

9 しかし、わたしの魂を滅ぼそうと尋ね求める者は地の深き所に行き、

10 剣の力に渡され、山犬の餌食となる。

11 しかし、王は神に在って喜び、神によって誓う者は皆、誇ることができる。

偽りを言う者の口はふさがれるからである。」

●詩篇84篇

詩篇84篇、これもなかなか素晴らしい詩です。4節から、

「4 あなたの家に住み、常にあなたを褒め称える人は幸いです。

5 その力があなたに在り、その心がシオンの大路に在る人は幸いです。

6 彼らはバカの谷を通つても、そこを泉の在る所とします。

「バカの谷」というのは、「悩みの谷」ともいわれる。乾いた谷らしい。乾ききった谷であっても、そこを泉させる、豊かな水を湧き出させる、そういう存在とさせてくださいと。

また前の雨は池をもつてそこを覆います。

「前の雨」と「後の雨」の二回、雨の季節があるそうです。それで作物を育ててくださいと。そういう神さまをあなたの抛り所に行っている人は、

7 彼らは力から力に進み、シオンにおいて神々の神にまみえるでしょう。

「シオンにおいて」というのは神の国です。そこで神々に勝る神さまにまみえるのだと。

8 万軍の神、主よ、わが祈りをお聞きください。ヤコブの神よ、耳を傾けてく

ださい。

9 神よ、われらの盾をみそなわし、あなたの油注がれた者の顔を顧みてくださ

い。

10 あなたの大庭に居る一日は、よそに居る千日にも勝るのです。

「よそに居る」というのは、娑婆に居るといつてもいい。悪の幕屋といつてもいい。この世



の悪の幕屋で千日過ごしてもしょうがない。あなたの大庭に一日で結構だ、その一日が私には素晴らしいんですと。

わたしは悪の天幕に居るよりは、むしろ、わが神の家の門守かどもりとなることを願います。

11 主なる神は、日です、盾です。主は、恵みと誉れとを与え、直なおく歩む者に良い物を拒まれることはありません。

12 万軍の主よ、あなたに信頼する人はさいわいです。」

そのとおりですね。

●詩篇91篇

次の91篇もこれもまた素晴らしい。

「⁵あなたは夜の恐ろしい物をも、昼に飛んでくる矢をも恐れることはない。

⁶また暗闇に歩き回る疫病をも、真昼に荒す滅びをも恐れることはない。

⁷たとひ千人はあなたの傍らに倒れ、万人はあなたの右に倒れても、その災い

はあなたに近づくことはない。

これは神さまを罵ののしる人たちです。「神を否定するそういった人たちが倒れても」ということで、善良な人が倒れるということは考えていない。そこは間違わないように。「たとえあなたを誇そしる千人が倒れても、その災いはあなたに近づくことはない」と。

⁸あなたは只ただ、その目をもって見、悪しき者の報いを見るだけである。

⁹あなたは主を避け所とし、いと高き者を住まいとしたので、

¹⁰災いはあなたに臨まず、悩みはあなたの天幕に近づくことはない。」

これはモーセの出エジプトのときに、鴨居かもいに羞こひつしの血を塗っている所は、疫病は全部避けて行った。塗ぬってない所は全部、疫病が忍び込んで、パロの王様の子どもまで殺された。それでパロは諦あきらめた。そういうことが出エジプト記に出てきます。あれを思い出します。

●詩篇103、121、130、139篇

それから素晴らしいのは103篇。これは旧約の福音といわれています。これはもうキリスト預言と言っていると思います。イザヤ書40章を思いださせます。ここで預言されたことが全部、キリストが実現された。だから、キリスト預言と受けとってください。

それから、121篇。これが讚美歌301番の

「山やまべにむかいてわれ目をあぐ」

はこの121篇から来てます。

それから130篇。これは義の神さまを前にして人間は、

「もしもともに神さまが人間の側の不義に目を止められたら、誰も立つことが



できません。しかし、あなたには赦しがある、あわれみがある、だから、あなたによりすがります」

と、素晴らしいことを言っている。それまでの詩篇はどちらかというところ、「私は正しいから、あなたは守ってください」と、自分の正しさをたてにとつて、「だから、守ってください。あんな悪いやつはやつつけてください」という感じがあるけれども、この130篇は、

「あなたがもし人の不義に目を止められるならば、誰もあなたの前に立てません。しかし、あなたには許しがあります、あわれみがあります。だから、お願いします」

という、福音の世界が展開しているんです。それが3節です。

「3主よ、あなたがもし、もろもろの不義に目をとめられるならば、主よ、それが立つことができましょうか。」

4しかしあなたには、ゆるしがあるので、人に恐れかこまれるでしょう。

5わたしは主を待ち望みます、わが魂は待ち望みます。そのみ言葉によって、わたしは望みをいただきます。

6わが魂は夜回りが^{あかつき}暁を待つにまさり、夜回りが暁を待つにまさって主を待ち望みます。

真つ暗闇の中の歩哨というのは、いつ敵にグサツとやられるかわからない。どこから襲ってくるかわからない。本当に真つ暗です。その歩哨として立っている人間は、「ああ、早く夜があけてほしい」と切に願っている。

「ああ、夜が白んできた、夜明けがきた。うれしい！」

という気持ち。それが、

「わが魂は夜回りが^{あかつき}暁を待つにまさり、夜回りが暁を待つにまさって主を待ち望みます」

ということ。

7イスラエルよ、主によって望みをいだけ。主には、いつくしみがあり、また豊かなあがないがあるからです。

8主はイスラエルをそのもろもろの不義からあがなわれます。」

と。それから139篇、これがまた素晴らしいんですよ。

「私はいつたどこへ行ったら、あなたの地から逃れられるでしょうか」

と。孫悟空みたいに、どこへ行っても、お釈迦さんの手の間を廻っていただけだったという。そういう気持ちで、「もうやけくそだ」と、どこかへ行っても、あなたの御手のうちにあったという。そして一転して今度は、

「私自身をあなたは造ってくださいました。まだかけらもなかったときに、あなたのプログラムの中に全部くみこまれていました」



と。それは後半部です。

「¹³あなたはわが内臓を造り、わが母の胎内でわたしを組み立てられました。

¹⁴わたしはあなたを褒め称えます。あなたは畏るべく、くすしき方だからです。

あなたの御業はくすしく、あなたは最もよくわたしを知っておられます。

¹⁵わたしが隠れた所で造られ、地の深い所で綴り合わされたとき、わたしの骨はあなたに隠れることがなかった。

¹⁶あなたの目は、まだ出来上らないわたしの体を見られた。

神さまの方でプログラムが出来上がっている。そのとおりに実現していきますよと。

わたしのために造られたわが齢の日のまだ一日もなかったとき、その日は
悉くあなたの書に記された。

¹⁷神よ、あなたの諸々の御思いは、なんとわたしに尊いことでしょう。その全体はなんと広大なことでしょう。

¹⁸わたしがこれを数えようとすれば、その数は砂よりも多い。わたしが目覚めるとき、わたしはなお、あなたと共に居ます。

そして一転して、

²³神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。

²⁴わたしに悪しき路のあるかないかを見て、わたしを永久の道に導いてください。「

●詩篇146、148篇

それから、146篇、これも讚美のうたです。148篇、これも讚美のうた。このへんにきますと、もう讚美、讚美、讚美です。148篇を読んでみます。

「主を褒め称えよ。諸々の天から主を褒め称えよ。諸々の高き所で主を褒め称えよ。

²その天使よ、皆、主を褒め称えよ。その万軍よ、皆、主を褒め称えよ。
³日よ、月よ、主を褒め称えよ。輝く星よ、皆、主を褒め称えよ。

「雪山賛歌」というのがありますね、

「雪よ岩よ われ等が宿り 俺たちや 街には 住めないからに」

とあるでしょ。あれなんです。私は、あの山男たちは本当にあそこで主を讚美してほし
いんです。御来光を拝むのもいいけれども。それ以上に主を讚美してほしい。148篇以下を
山男に贈りたいですね。ちゃんと書いてますよ、

「火よ、あられよ、雪よ、霜よ、御言葉を行う嵐よ、諸々の山、すべての丘、
実を結ぶ木、すべてのの香柏よ、野の獣、すべての家畜、這うもの、翼ある鳥



よ、¹¹地の王たち、すべての民、君たち、地のすべての司よ、¹²若い男子、若い女子、老いた人と若い者よ、¹³彼らをして主の御名を褒め称えさせよ。その御名は高く、たぐいなく、その栄光は地と天の上に在るからである。¹⁴主はその民のために一つの角をあげられた。

これはキリストのことです。

これはすべての聖徒の褒め称えるもの、主に近いイスラエルの人々の褒め称えるものである。主を褒め称えよ。」

●詩篇150篇、イザヤ書44章

それから最後の150篇、これも、

「主を褒め称えよ。その聖所で神を褒め称えよ。その力の現れる大空で主を褒め称えよ。²その大能の働きのゆえに主を褒め称えよ。そのすぐれて大いなることのゆえに主を褒め称えよ。³ラッパの声をもって主を褒め称えよ。立琴と琴とをもって主を褒め称えよ。⁴鼓と踊りとをもって主を褒め称えよ。緒琴と笛とをもって主を褒め称えよ。⁵音の高いシンバルをもって主を褒め称えよ。鳴り響くシンバルをもって主を褒め称えよ。⁶息のあるすべてのものに主を褒め称えさせよ。主を褒め称えよ。」

そして、旧約聖書のイザヤ書44章21～23節、

「²¹ヤコブよ、イスラエルよ、これらの事を心にとめよ。あなたはわが僕だから。わたしはあなたを造った、あなたはわが僕だ。イスラエルよ、わたしはあなたを忘れない。」

²²わたしはあなたの咎を雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたを贖ったから。

「贖ったから帰ってこい」なんです。「帰ってきたら贖ってやる。帰ってきたら赦してやる」ではない。

「贖った、赦した。だから、帰ってこい」という。それをキリストが実現してくださった。だから、

²³天よ、歌え、主がこの事をなされたから、地の深き所よ、呼ばわれ。もろもろの山よ、林およびその中のもろもろの木よ、声を放って歌え。主はヤコブを贖い、イスラエルのうちに栄光を顕わされたから。」

「山よ、木よ、星よ、叫んでくれ！」

という。山の男がこれをやってほしいね、山の上で、この詩篇を持って行って。それを山男たちにお願いたいと思います。どうぞ、皆さんが、本当に主を讃えてほしい。人生は神讚美！これが最高ですから。それではこれで終わります。



● 祈り

お祈りいたします。主さま、イエス・キリストさま、会場の皆さまと共に、あの昔のダビデの時代、今から三千年も昔の時代に、本当にまだあなたがいらつしやらないそのときに、あのエホバの神さまに馴れ親しみ、畏れかしこみ、そして、

「あなたの御言は蜂蜜より甘い」

といて、素晴らしいあなたを讃えて、あなたを仰ぎみて歩んで行つたイスラエルの民。その民をあなたは贖つて、本当の神のイスラエルにしてくださいました。しかし、イスラエルの民はまだそれに気づいておりません。全世界もまだあなたに委ねておりません。けれども、必ずあなたの御意はこの地に成つていきます。

今日お集まりになられたお一人お一人が本当にうちにあなたという生命を宿し、

「たとえば、この身体が土に還ろうと、私の中には永遠なるものが来ている、生命の泉が湧いている、さあこの泉からどんどん飲みなさい。そして共に主を讃えることができるよ」

という、そうした大いなる喜びと感謝と讚美をもって、およそ宗教という世界を突き抜けた、本当に太陽が輝いて万物を照らすような、そういう次元へと私たち一人びとりを導いて、この大和民族を顧み救いあげてくださいるように、お願いいたします。お一人お一人はあなたの器です。主さま、どうぞ、一人びとりをあなたのお遣いとして、これからお用いくださいるように、希い奉ります。

この素晴らしい時を与えてくださったことを感謝し、主イエス・キリストの御名によって、讚美と感謝を御前にお捧げいたします。アーメン

